

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年6月10日現在

機関番号：30110

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2010～2012

課題番号：22659416

研究課題名（和文） リクール解釈学からの方法論の開発と出産の生きられた経験の解釈と構造の探究

研究課題名（英文） Inquiry into women's lived experience of childbirth: Attempt to develop a methodology inspired by Ricoeur's hermeneutic philosophy

研究代表者

伊藤 道子 (ITO MICHIKO)

北海道医療大学・看護福祉学部・准教授

研究者番号：50341681

研究成果の概要（和文）：

本研究の目的は、出産体験はどのように意味づけられるのかを探究することを目的とする。この目的を達成するために、方法論を開発することを目指す。研究参加への同意が得られた29名にインタビューを実施した。女性が置かれた文脈によって何を意味として捉えるのか異なることが示唆された。

研究成果の概要（英文）：

The aim of this study was to explore how women give meaning to childbirth experience and to attempt developing methodology based on the philosophy of Paul Ricoeur. The participants were twenty-nine women who had experienced childbirth. It was suggested that women have caught as a meaning by embedded oneself in experience.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	600,000	0	600,000
2011年度	600,000	180,000	780,000
2012年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	1700,000	330,000	2030,000

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：看護学・生涯発達看護学

キーワード：出産・生きられた経験・解釈学

## 1. 研究開始当初の背景

妊娠・出産は、古来から営まれてきた女性のライフ・イベントであり、健やか親子21の主要課題にも妊娠・出産の満足度を100%に高めることが挙げられている。また、不満足な出産体験は、産後うつ病の発症要因の一つであると言われていることから、満足のゆく出産体験となるような支援者の役割が求められ

ている。しかし、満足という概念は、非常に多面的で曖昧な性質をもっているため、出産に対する全体的な反応として満足の程度を、数量化により測定し実証するのは困難であると指摘されている (Bramadat et al., 1993)。

陣痛中・出産中の女性は感受性が非常に高い。海外では、約1.5～6%の女性が出産後に心的外傷後ストレス障害に進展し (Beck, 2004)、

産後の不安障害は産後うつ病に比べてより多く発症していると報告されている (Ayers et al., 2008)。また、多くの女性の出産体験の評価は、全体的には肯定的であるが、ある側面は否定的な感情を伴っている (Waldenström et al., 1996; Mackey, 1998; Lavender et al., 1999) ことや、出産直後には肯定的評価であっても年月の経過とともに否定的評価に変化する側面がある (Waldenström, 2003; Waldenström, 2004; 我部山, 1998; 我部山, 2001) ことが明らかとなっている。これらの報告は、出産体験には否定的な側面が伴いやすいことや、出産の否定的体験がその後の女性の健康状態に影響する可能性を示唆している。

齋藤 (2008) の出産満足度研究の研究分担者として、量的研究方法で得点化した満足度と、自由記載欄に記述している出産体験の認識が必ずしも一致しないことに気づいた。その中には、満足度が高くても前回の出産でトラウマ体験を経て出産に至った女性も存在していた。出産体験は個人にとって、何が特に重要なかを把握できていないことがわかった。

## 2. 研究の目的

出産体験はどのように意味づけられるのかを生きられた経験として探究することを目的とする。この目的を達成するために、方法論を開発することを目指す。

## 3. 研究の方法

(1) Ricoeur の著書から、彼の解釈学の系譜と方法論の記述の有無について読み解く。次いで、看護学研究者として解釈学的現象学の方法を記述している Lindseth & Norberg (2004) と Munhall (2012) の著作を解説する。これらの解説に基づき、本研究の問いと方法論の適合を検討する。

(2) Ricoeur のテキスト解釈学理論を用いた看護学研究の研究の動向を調べる。

(3) 出産を体験した女性に対して、インタビューを実施する。産後1ヵ月健診および産後4ヵ月健診に来院した女性に対し研究目的と方法、倫理的配慮について説明して研究参加者を募集する。「満足な出産体験とは何か」を研究の問いとし、参加者に対して非構造化インタビューを実施する。インタビューは、出産体験の意味を理解するために、対話の中で女性の語りたいことの意図を文脈でとらえながら聴く。女性の語りを逐語録に起こしてテキストを作成する。研究の問いに対する語りを十分聴けていない場合は、再度インタビューを実施する。

## 4. 研究成果

(1) 解釈学は書かれたもの、すなわちテキストを解釈することを学問の対象としており、聖書解釈とギリシャ、ローマの古典解釈が起源である。それらが一般解釈学として統合された後、哲学の領域では Dilthey (1833-1911)、Heidegger (1889-1976)、Gadamer (1900-2002) そして Ricoeur という系譜に至る。Heidegger と Gadamer が存在論的解釈学であり続けたのに対し、Ricoeur は解釈の認識論を目指して、これらの哲学者の他に現象学の創始者である Husserl (1889-1938) の記述現象学や Saussure (1859-1913) の言語学と積極的に接触していった。Ricoeur は、ポスト構造主義の哲学者として位置づけられているが、その哲学的態度は Hegel (1770-1831) の弁証法を基幹としており、意志の現象学、象徴の解釈学から言語論的転回を経て、1970年代にテキスト解釈学を構築した。彼は、いかなる人間の行為もテキストとみなすことができ、解釈可能であると主張している。テキスト解釈学の概念は、「説明と理解」「疎隔」「自属化」に代表される。ひとつの現象を理解するためには説明が必要であり、説明するためには理解が必要である。「理解」には二つの段階があり、最初は推測であるが、最後には「自属化」(テキストを自分自身のものにすること)に至る。「説明」は「理解」のこの二つの段階の媒介として現れる。すなわち、解釈することは説明と理解を包含するすべての過程に適用されると述べている。

『時間と物語 I』(1984)で Ricoeur は、人間の時間経験の言語化を目指し、次のような仮説を提示した。「時間が物語の仕方でも分節されるのに応じて、時間は人間的時間となる。逆に、物語が時間経験の諸特質を描き出すのに応じて、物語は意味をおびる」(p. 3)。この著作で彼は、物語ることを通して生きられる時間を示し、筋と模倣的活動の概念が探究された。

模倣的活動は、写しあるいは同一の模倣を作ることではない。「模倣ないし再現とは、何かを産み出すものということでミメシス活動なのであり、すなわち、まさに筋立てることによって出来事を組み立てることなのである」(p. 62)。筋は、調和のモデルであり、この調和は完結性、全体性、適度の大きさによって特徴づけられる。調和のモデルはまた、アリストテレスが「逆転」と名づける悲劇的行動の不調和も含む。悲劇においては、逆転は幸福から不幸の方向へ流れを変えるが、その報告は逆転し得る。

Ricoeur はさらに、物語の時間的な相を三つのミメシス活動とその循環から、より広範囲な文脈を見据えた。すなわち、人間の行動を筋立てる活動をするミメシスIIを中心に、その前段階の過程をミメシスI、その後

続く過程をミメシスⅢとして循環させた。ミメシスⅢは、ミメシスⅡで作成したテキスト世界と、聴衆または読者の世界との交叉である。「テキスト世界において解釈されるものは、私がそこに住むことができるような、そこに最も私固有の力を投企できるような世界の提示である」(p. 143)。以上の方法により、解釈に伴って物語が現れてくることを明示していた。

Lindseth & Norberg(2004)は、Interpretation Theory(Ricoeur, 1976) (邦題『解釈の理論—言述と意味の余剰』)から解釈学的方法を開発した。その方法は、次の通りである。

- ① テキスト全体の意味を素朴に把握するために、数回テキストを読む。
- ② 研究の問いに対する答えをテキストから読み取り、意味の構成単位を取り出して、何のテーマについて語っているのかを示すために名前をつける。
- ③ テキストの構造分析を行う。意味の構成単位の個々の事象を、サブテーマに置き換える。
- ④ テキストの全体解釈を行う。各サブテーマの内容を包括するテーマを、研究の問いに照合しながら記述する。①の素朴な把握の視点でテキスト全体を再度読み直し、テーマ記述の妥当性について検討する。

Munhall(2012)が述べる現象学的方法は次の通りである。現象学的探究の主要な要点は思考の様式であり、期待していなかった結果を発見する発見的プロセスになることである。現象学的探究のための方法のアウトラインは、①没入 ②探究の現象学的目的が現れてくる ③存在に関する探究、表現、加工処理 ④現象学的文脈の加工処理 ⑤解釈学的相互作用の分析 ⑥現象学的ナラティブを記述すること ⑦あなたの研究の意味とのかかわりでナラティブを書くこと、である。

本研究の研究課題である出産体験は、その女性のそれまでの人生と、これから先の人生という文脈の中で理解されることが求められる。「全体とは、始めと中間と終わりをもつもの」(時間と物語Ⅰ、p. 68)である。出産体験の年代順的時間での出来事の次元と、出来事を全体的に捉えた非年代順的時間での出来事の次元を結合する働きをもつ筋 plot を用いて筋立てることによって出来事を組み立てることは、この研究課題の方法論として有用であると考える。

(2) オンライン・データベース『CINAHL』『Medline』『Web of Science』を用い、1990年から2012年までの検索年度でリクール解釈学に関するキーワード「Ricoeur」「hermeneutic」「phenomenology」と方法論に関するキーワード「methodology」「method」「nursing」で絞り込んだ。総論および英語以外の言語の論文を

除き、計130件の論文を概観した。

論文件数は、1990年～1994年0件、1995年～1999年20件、2000年～2004年34件、2005年～2009年41件、2010年～2012年35件であり、2000年頃から研究が急増していた。研究者の所在地は、北欧諸国が約7割を占め、米国および英国が各5件、ブラジル4件、カナダおよびオーストラリア、オランダ、キプロスが各2件、スイスおよびイランが各1件、不明12件であった。用いられたテキスト解釈学理論は、Interpretation Theory(Ricoeur, 1976) (邦題『解釈の理論—言述と意味の余剰』)が大部分を占めた。表1に2011年～2012年に公表された研究の一部を示す。

表1 Ricoeurの方法論を用いた看護学研究 (2011年～2012年)

著者	年	目的	方法論
Thrysoe, L. et al	2012	新人看護師のコミュニティ・メンバーとの相互作用と、それがコミュニティ・メンバーにどのように影響を及ぼすのかを探究する	解釈理論
Spidsberg, B. D. et al	2012	レズビアン女性とパートナーへのケアリングする助産師の生きられた経験を記述する	解釈理論
Sadala, M. L. A. et al	2012	慢性腎臓病患者が経験する家庭での透析の意味を明らかにする	解釈理論
Petersen, K.	2012	心的疾病をもつ成人が経験する住宅供給計画におけるサービス利用者の関与を探究する	解釈理論
Mazanderani, F. et al	2012	以前に実施した質的インタビューの二次的分析	隠論

Martinsson, G. et al	2012	心的障害をもつ高齢者が経験する人生の状況の意味を明らかにすること	解釈理論
Martinsen, B. et al	2012	プライベートホームにおけるケアの依存の意味を記述すること	解釈理論
Krieger, B. et al	2012	アスペルガー症候群をもつ成人が労働マーケット参加での成功に寄与する文脈的要因に関する深い知識を獲得すること	物語論
Kouwenhoven, S. E. et al	2012	急性期の抑うつ症状に苦悩する脳卒中サイバーの生きられた経験を記述すること	解釈理論
Johansson, L. et al	2012	集中的に音が鳴る ICU において、危篤状態となることの意味を説明すること	解釈理論
Freysteinsson, W. et al	2012	乳房切除後に続いて映し出される自分自身の見方の経験を記述すること	解釈理論
Dale, B. et al	2012	南ノルウェイの田園地域で高齢者が一人で暮らす間の人生状況と、アイデンティティの知覚に対するセルフケアと健康の意味を説明すること	解釈理論
Berg, S. K. et al	2012	ICD リハビリテーションプログラムに参加する患者の知覚から評価すること	解釈理論

Angel, S. et al	2012	患者はどのようにして介入の間、利用できる説明的資源を解釈したのか、そして個人の歴史の中にこれらの資源をどのようにして統合したのかをより深く理解すること	解釈理論
Tan, H. M. et al	2011	緩和ケアを受ける患者と家族の経験を探究する	解釈理論
Nystrom, M	2011	失語症に苦しむ人に関連する実存的な成り行きを説明すること	解釈理論
Missel, M. et al	2011	不治のがんと診断された患者は、どのように病気とともに生きる経験をしているのか、そして、患者の人生における状況、リアリティ、現象の見識と理解をどのように提供するのかを探究すること	解釈理論 物語論
Martinsson, G. et al	2011	地方都市におけるホームヘルプサービスで心的障害をもつ高齢者を世話するケアリングの意味を記述すること	解釈理論
Krinstensen, H. K. et al	2011	脳卒中リハビリテーションの3段階における作業療法の中の、日常生活作業のエビデンスに基づいた実践とクライアント中心の実践を促進すること	解釈理論

		を調査する	
Buus, N.	2011	精神科病院の看護スタッフがスーパービジョンに参加したリフレクションを探究する	解釈理論
Angel, S. et al	2011	脊椎損傷患者はどのようにリハビリテーションと格闘しているのか、このプロセスに影響を及ぼす専門職をどのように感じているのかを調べること	物語論

(3) 研究参加への同意が得られた 29 名にインタビューを実施した。先行研究では、否定的な出産体験の要因として指摘されている緊急帝王切開分娩、和痛分娩、前回は早産を経験した女性も自らの出産体験を語りたいと参加しており、女性が置かれた文脈によって何を意味として捉えるのか異なることが示唆された。出産という行為の時間経験を、筋立てることによって出来事を組み立てるといった物語論と時間論を組み合わせる Ricoeur の方法論を用いて分析中である。家族を作っていく物語、自分を見つめなおす物語、過去を清算する物語などが構成される見通しである。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 1 件)

- ① 大久保 功子、[経験<sub>を</sub>記述する 現象学と質的研究] 経験を理解するという探究の経験を通しての記述、看護研究、査読無、Vol145、2012、pp. 337-345

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

伊藤 道子 (ITO MICHIKO)  
北海道医療大学・看護福祉学部・准教授  
研究者番号：50341681

### (2) 研究分担者

大久保 功子 (OKUBO NORIKO)  
東京医科歯科大学・保健衛生学研究科・教授  
研究者番号：20194102